新響合唱団 鯨

第九

特別演奏会

指揮 芥川也寸志

Bach＝Stokowski　　トッカータとフーガ　ニ短調

L. V. Beethoven　　交響曲第9番 ニ短調作品125
「合唱付」

1972年12月17日(日) P. M. 6：30　19日(火)　P. M. 7：00
日 比 谷 公 会 堂

指揮　芥川也寸志

独唱

Sop.　常森寿子
Alt.　志村年子
Ten.　金谷良三
Bar.　原田茂生

管弦楽　新交響楽団
合　唱　合唱団“鯨”



——プロフィール——

指揮 芥川也寸志



１９２５年　東京生れ。
１９４９年　東京音楽学校研究科作曲部を卒業。
作品——交響三章、トリプティク、交響曲第一番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲。
１９５６年新響発足以来の常任指揮者であり、１９６９年音楽監督就任、１９６８年には合唱団“鯨”を組織するなど、アマチュア音楽界に於る貴重な指導者でもある。
日本作曲家協議会副会長、日本現代音楽協会会員。

——独唱者——

ソプラノ
常森寿子

東京芸術大学声楽科卒。
１９６６年、藤原オペラの「カルメン」のミカエラでデビュー、絶賛を博した。
翌年「マノン」「カルメン」と続けて出演、将来を大いに期待された。
１９６８年渡伊。ローマのサンタ・チュチリア音楽院、及びミラノにて勉強し、１９７０年イタリアのロニーゴ国際コンクールで２位を受賞、続いてスイスのジュネーブ国際コンクールで銀賞を受賞した。
天性の美くしく、水々しい高声域と安定した歌唱力を持つソプラノとして、今後の活躍は大いに注目される。

アルト
志村年子

１９６７年渡独、フランクフルト国立音楽大学に入学、１９７０年にコンサート・エグサメン（演奏家資格試験）に合格、最優秀賞を得て卒業。その間バーミンガムに大学代表として演奏旅行を行なった。
１９７０年に帰国、７月に日生サロンで、翌１９７１年２月にイイノホールで、リサイタルを開き好評を得た。同年、西独フランクフルトなどで、リサイタルを開いた。現在、二期会公演オペラ、ドイツ歌曲のコンサートなどで、幅ひろく活躍している。

テノール
金谷良三

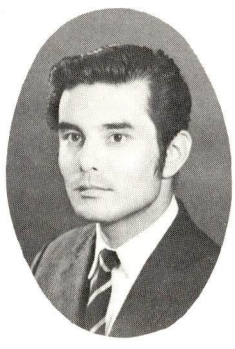
大阪放送合唱団を経て、芸大声楽科卒業。東京混声合唱団の創立に参加し、現在に至る。
その間、薗田誠一、渡辺高之助両氏に師事し、多くの指揮者、独唱者、オーケストラと共演している。オペラもＮＨＫ創作歌劇の夕べや都民劇場、藤原歌劇団公演に参加し、レパートリーは年を追って、その数を増しスピントテナーという声質上、我が国でも貴重なポストを得ている。オペラもさる事ながら、第１回リサイタルではリートにも深い関心を示し、特に宗教曲には人一倍の熱意と成果を示している。

バス
原田茂生

京都大学工学部卒業後、東京芸術大学に入学、声楽科を卒業、同専攻科を終了。
１９５９年芸大オペラ「魔笛」のパパゲーノでデビュー。１９６１年渡独。ミュンヘン音楽大学に留学後、ベルリン音楽大学に移り、卒業と同時にプフォルツハイム歌劇場と専属契約を結んだ。１９６９年の帰国の際、「魔笛」「セヴィリアの理髪師」で、軽妙で緻密な、又、１９７０年の「大仏開眼」（清水修曲）の牛麻呂では、頭脳的な演技をみせている。
他、各種のコンサートに活躍している。









交響曲第九番

《作曲の経過》

ベートーヴェンは生地ボンにいた時からすでにシラーの「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたらしい。1793年1月26日に、ボンのフィッシェニッヒはシラー夫人に書を送り、「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げている。1798年の作曲スケッチブックには、この長い詩の一部が旋律とともに書きつけられてある。1812年のスケッチブックには、詩の始めのことばが、旋律をそえられずに書かれており、そのかたわらに、作品115「命名式」序曲に用いられた主題が記入されている。いっぽう1809年のスケッチブックには、われわれが今見るような、交響曲第九番の第一楽章第一主題への導入音形がすでに書きこまれている。

1812年には「ニ短調交響曲」なる字がスケッチブックに現われる。ついで1815年のノートには、第二楽章のスケルツォの主題が書きあらわされている。しかし1809年の譜形およびこれが「二短調交響曲」のためのものであったかどうかは不明である。しかるに1817年のノートは現在のスケルツォの主題と音は違うが、動機を等しくする楽譜が現われ、これに続いて第二楽章の一部をなす楽想が書いてある。第三、第四の二楽章に関しては、何事も書かれていない。1818年後半に用いられたノートの中に古い教会旋法による「主なる神よ、我ら汝を讃美すーアレルヤ」のことばを用いた合唱を、交響曲にとりいれようとの構想が文字で書かれている。また第三楽章にギリシア神話による歌詞を、取りいれることを考えたあとも残されている。さらに1822年の夏、または秋に用いたノートには「歓喜」の初めの旋律が散見し、合唱のコラールに似た旋律も見いだされる。1822年10月10日に、ロンドンのフィルハーモニック・ソサエティから交響曲の作曲依頼状がとどいた。これは今までベートーヴェンの頭のなかに、うかんだり消えたりしていた合唱附交響曲の構想を、いっきょに実現におしすすめるのに役にたった。そして1823年の終わりか、あるいは24年の初めに、この巨大な交響曲は完成した。「歓喜」の作曲の意図をいだいた時から、完成の時までを通算すると約31～2年にわたる。

（辻　荘一）

《作曲から初演まで》

作曲はできあがり、もう初演を待つばかりであった。彼はこれを持って英国へ行こうかと考えたのであった。貧困がそう考えさせたのであるが、彼の貧困の原因は、ウィーンが依然として彼に対し冷淡であった事だった。1823年、当時ウィーンは、イタリアニズムの絶頂であった。ロッシーニでなければ、夜も昼もあけないような状態であった。ベートーヴェンも前年1822年に「フィデリオ」の再演をしてから、新しいオペラを書く計算をした。しかし彼は当時のイタリア・オペラの全盛を見ながら、結局時勢に投ずる能力も、進んで試みる意欲も出てこなかった。そういうオペラにあり勝ちな軽薄な内容を好まなかった。彼は何かしら道徳的に向上させるものが欲しかった。彼の心は、やっぱり「フィデリオ」にもどって死に至るまで、これの改訂を試みたのである。オペラを断念する事は、当時のウィーンの人々と積極的な音楽的接触のなくなる事であった。それにベートーヴェンは、1816年以来病苦、貧苦、甥に関係した事件などで、ピアノ　ソナタの他は殆ど作曲をしなかった。彼のライバルは、これを見て、ベートーヴェンは創作能力が無くなった。といいふらした。彼は、ほぼ同時期にかいた「荘厳ミサ」についても、早く経済的な結果を得たかったが、方々の王室へ手紙を出したにもかかわらず、予約の返事がなかなかこなかった。経済的に詰ってきた彼は、第九交響曲が、ロンドン・フィルハーモニーと契約があるところから、いつも行きかけては色々な都合で止めていたロンドン行きを第九の楽譜を携えて決行しようと思った。ところが、これが貴族の間に知れると彼らは再び騒ぎ立った。彼らはまた、彼がウィーンに留るように運動した。

「私達は貴方が新しい聖楽《荘厳ミサ》を作曲して、あなたの深い信仰から湧き出た感情を表現した事を知っています。あなたの偉大な心の中に射した天上の光は、そこに輝いています。私達は同時に、あなたの偉大な交響曲の冠は大きくなって一つの不朽の花をつけた事も知っています。数年来貴方の姿が見えないので、貴方の方へ眼を向けていた人々は皆悲しんでいました。現代の芸術家の中で、あんなに高い位置を占めている天才が沈黙していて、一方では外国音楽のある種類のものが、我国の中に移住せんと努め、独逸芸術の作品を忘却の中に葬り去らんとしているのを、すべての人が悲しく考えました。今の流行に超然として、新生面、新しい月桂樹、真実と、美の統べる新時代を期待すべき人は、唯あなたあるのみです。間もなく、私達の欲求が、かなえられるという希望を与えて下さい。来るべき春にあなたの賜物のおかげで、私達及び一般の人々のために、二倍の花の咲かん事を！」これが、その時、彼を引きとめるための勧誘状であった。このように心を強く打つ勧告の手紙を見て、深く感銘した彼はすぐさま、ウィーン出発の計画を放棄して、この土地で初演を決行する事にした。

（長谷川千秋）

《初演に際して》

1824年5月7日、ケルントネルトール劇場で演奏会は開かれる事になった。プログラムは、ハ長調の序曲「命名式」作品115。「荘厳ミサ」の中のキリエ・クレイド・アニュスディの三章と第九交響曲と決まった。

しかしそのころすでに彼の耳は、ほとんど音を聞きとることができなくなっていた。彼がピアノに向いピアニシモを出そうとして、そっとキイを下す時は、全然音が出ないのであった。ベートーヴェンは、その無音の中に音楽していた。その時、彼はその無音の中に音を聴いていた。彼の顔の表情と、指の動き方で、この無音の中に深いピアニシモの感情が流れているのを、まのあたりに見る人は、非常な感動を覚えるのであった。そしてベートーヴェン自身が、他人の弾く音楽を聴く時は、かくの如く無音であろうと、想像するのであった。

晩年には、彼は棒をくわえて、その棒の先をピアノのボディにあてて、自分の弾く音を聴いた。といわれている。彼は歯で聴いたのである。

彼の耳はこんな状態であった。そこで彼が指揮しようというのを、友人や弟子達は、やめさせようと思って、それを彼に持ちかけた。「序曲は、確かにあなた独りで全部指揮できるでしょう。併し、それであなたの耳は、大分お疲れになるでしょうから、あと全部を指揮される事は、お勧めしません。それよりも、あの上の方で、お聴きになるのが一番いいでしょう。」しかし第九交響曲の指揮は、人々のすすめにかかわらず、やはり彼が指揮台に立つ事になった。

練習が始まると、曲が難かしい為に、イタリア歌劇に馴れていた歌手の間から非難が起こった。彼らは方々に楽譜の訂正を願った。ベートーヴェンは、いつもの所信で、断呼として拒絶した。レシタティーフの独唱者は、難かしい為に独唱者の入れ替をした。

5月7日の演奏会の当日、群衆は非常な勢で殺到した。劇場は満員であった。

いよいよ第九交響曲の番になった。オーケストラの前には、中央に指揮者が二人立った。古今未曽有の光景である。一人は聾のベートーヴェン。一人は楽員が頼りにしている常任指揮者のウムラウフ。ベートーヴェンの指揮は猛烈であった。彼は、ほとんど全部が彼には注意しないで、ウムラウフばかりに頼っている楽団に対して、何を指揮しようとしたのだろう。彼の激しい身振りは、気狂いのようであった。ピアニシモになると、ひどく身を低め、譜面台の下にもぐって、ほとんど床につかんばかりであった。そしてクレシェンドがくると、段々と体を伸ばして、伸び上がり、次第に高く反り上がって、ついにフォルテシモに達すると、彼は腕を一杯に広げて、爆発するように宙に飛び上がった。まるで、できれば、雲の上にまでもかけ上らんばかりの勢であった。しかも全楽員は、ウムラウフの棒ばかり見ていた。

終楽章は終わった。聴衆の熱狂と喝采は、劇場もゆらぐばかりに湧き上った。場内は怒濤のような拍手と感激の嵐の中に、耳を聾せんばかりであった。しかもこの轟々とした音が、後向きのベートーヴェンには、何もわからなかった。

彼は、演奏を終えた時、後の熱狂には少しも気が付かず未だ指揮棒を手にしたまま、寂然として、立っていた。これを見かねたアルトのソリスト・ウンゲルは、彼の手をとって彼を向けてやった。彼は初めて、聴衆の嵐が判った。そこで再び雷のような喝采の轟きがわき起った。人々は、この感激と熱狂を聾の彼に知らせようとして、総立ちになって手を振り、拍手し、ある者は、この悲壮な姿を眺めて同情の涙にくれた。

演奏会は終わった。すでに音楽会の準備の為に、くたくたになっていた彼は、重なる心身の疲労と、この興奮とで正気を失ったようになってしまった。人々は、彼を家にはこんだ。彼は、そこで黒の燕尾服に、白い襟飾をつけた音楽会の服装をつけたまま、一晩中、飲みもせず食いもせず、うつらうつらした状態で、朝まで寝ていた。

この素晴らしい成功をした音楽から、彼の手に何が残ったか。何にも残らなかった。種々な費用を差引いて、彼の手に渡されたのは、わずかの金であった。

音楽会はその月の23日に多少のプログラムの変更をして再度開かれた。この時は、ベートーヴェンに保証の金額を渡す約束であった。ところが、疑深い彼は、この約束の金を黙って受取るように素直に出なかった。ウムラウフらが、全力をつくして、音楽会の準備をしてやっているにもかかわらず、彼は、彼らに何かしら卑しい下心があるのではないか、と疑った。彼は、ウムラウフらを食事に招待した。彼は、その食卓で、恐ろしい勢で不満を爆発させた。ウムラウフらも感情を害し卓を蹴って帰ってしまった。これにより彼は真に感謝すべき相談相手を失ってしまった。

これが、音楽会後に残った、その結果であった。歓喜へのタクトは、この世に於いては、唯空を切っただけであった。

（長谷川千秋）

ベートーヴェンの叫び

苦　悩

この二、三年来、僕には静かな安らかな生活はやめになり、世間の生活の中に力で引入れられてしまっている。それに報いる結果は、まだ何もつかんでいない。むしろ、おそらく、その逆だろう。――でも、いったい誰には外からの嵐もまた作用してはならない、なんていえるだろうか。とはいうものの、もし魔神が僕の耳の中に鎮座してしまわなかったなら僕は幸福だったろうに。たぶん最も幸福な人間の一人であるかも知れない。

僕がもしどこかで、人間は一つも良い仕事をやりおおせないうちは、勝手に生命を断つのは許されぬ、ということを読まなかったならば、もうずっと前に僕はいなくなっていたろう――僕自身の手でね。――

おお、人生はこんなに美しい。　しかし僕にあってはそれは永久に毒を盛られているのだ。……

神よ助けよ！　貴方は私が人類全体から見棄てられたのを見ている。不正なことを私は、何一つ犯そうとしないからだ。私の訴えをききとどけよ。

おお苛酷な巡り合わせ！　おお惨忍な宿命！　否、否、私の不幸な状態はおわりっこない。

作　曲

私は、いちばん書きたいものだけ書いているわけではない。そうでなく、私が使う金のために書く。でもそのことのゆえに、私は金のためにのみ書くとはいえない。

お前を救うには、ここから立去る以外に方法はない。それによってのみ、お前は、下劣さの中に沈んでいることで、もう一度お前の芸術の高所へ、そのように飛翔することができる。交響曲一曲だけ、それでおさらばだ！その間、俸給は受取られる。それは一年のうち、いつ起きてもよい。

甥カール

唯一つだけ私は誤ちを犯した。しかし一人の父親から――私は父親だったし、今も父親なのだが――彼の子供たちを奪いとることはできない。それは、たとえ誤ちが教育の家で行なわれるとしても、そのことは、私から後見をそれ故に取上げてしまったら、という希望を少しも挫かないのと同様にだ。私はいつだって迅速に、目的に適って行動してきたから……。

芸　術

世界は王様だ。それは、おべっかを使われるのが好きだ。自分を恵み深く見せようというわけだ。――でも真の芸術は、我執が強くて、おべっかを使う形式に無理に嵌め込まれはしない。有名な芸術家たちは何時もとらわれている。だから彼らの初めの諸作品がやはり最良なのだ。暗い懐からそれらのものは生まれ出たにしてもだ。

芸術は長く、人生は短かいと人は言うけれども、長いのは人生だけであって、芸術は短かいのだ。芸術の息吹きは、われわれを神々にまで高めるにはちがいないが、その息吹きは、一瞬の恵みにすぎぬものだ。

もし私が、私の生命力を生きることに捧げるようとでもしたら、いったいどんな高貴なものや、一段よいものが残ったろうか。

合唱団“鯨”団員募集

創立5周年を迎えた“鯨”は、私達自身の手で造り上げていく合唱団です。
どなたでも御入団になれますので、ぜひ練習を見学にいらして下さい。

＜指　　揮＞芥川　也寸志
＜定期練習＞毎週火曜日　渋谷カワイ楽器7階ミュージックサロン　P.M.6：30～9：00
＜練習曲目＞ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」
＜申 込 先＞〒160新宿区須賀町14大湊ビル　合唱団“鯨”事務所（357）5255（但し平日午後）
（入団費500円　団費700円）

合唱団鯨の春と夏

3月に1泊2日、4月に2泊3日の合宿が行なわれました。場所は読売ランドホテル。参加率は宿泊組・日帰り組合わせて、3分の2位だったと思います。

ピアノ1台とオルガン3台を運びこみ、発声練習、パート練習、全体練習という形で進めました。練習時間は、午前2時間、午後4時間、夜2時間の割合で行なわれました。曲目はブルックナーのミサ第3番。一日中ブルックナーと接したことは、かなり疲れました。

そんな事を言いながらも、練習の合い間には下手なりに楽しく卓球に興じたり、夜はみんなでおしゃべりをしたり、うたをうたったりしました。

うたうことが好きで集っている私たちには、充実した練習は自分たちの力で創り出した大切な時です。私たちに与えられた共通の時間を、1人1人が自覚をもって参加することが、鯨を前進させる原動力になるのではと、何となく物足りなかった合宿を思いつつ考えました。



食事時間。持参のおかずも大好評。



発声の個人指導。次はわが身と思うと、カメラに向って笑うことなんて……。

キャンプ
8月6日
～8日

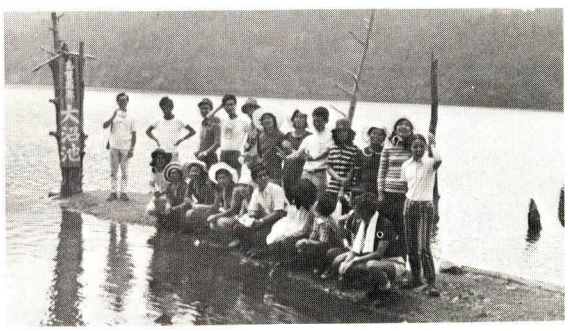


マイクロバスで一路志賀高原へ。

今夏、我が鯨では「キャンプファイヤーを囲んで天の川を見つけよう！」とのテーマの下に、志賀高原に於いてキャンプ大会を行なった。合唱団のキャンプにふさわしく、6時間に及ぶバス内では美しいハーモニーが常に響き（バスと共に皆の音程は上下左右に無限に変化した。）、天候の良さと共に楽しく木戸池キャンプ場に到着した。

やがて陽は沈んでしまい、夕食の準備とテント張りは、闇の中で作業することとなった。腹はへるし、寒いこともあって面倒臭くなったが、ここで女の子に怠け者と思われるのは不覚と、仕方無しに作業を手伝った。そのうちには夕食の用意も出来て、「さあ、これからは俺達の天下！」と、男共は一升ビン片手に日頃鍛えし自慢ののどで、合唱とは程遠い奇声を張り上げたものだ。透き通る星空の下での酒盛りは、男共にとっては実に快いものであった。

8月の志賀高原は実に美しくて、2泊のキャンプ大会は互いの心の結びつきと共に、合唱の微妙なハーモニーに大いに力あるものと思われた。



大沼池にて……。

新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身と同じですが純然たるアマチュアのオーケストラで、名簿に見るように、サラリーマン、学生、主婦など、音楽を職業としない120名の団員から構成されています。

週1回土曜日、東京文化会館地下のリサーサル室での練習を基礎として、月々400円の団費と、演奏会の収入による独立採算で運営されています。

昭和31年創立以来の常任指揮者芥川也寸志氏の献身的指導によって、現在日本で望み得る最高レベルのアマチュアオーケストラとされており、42年秋の訪ソ旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、週1回2時間半の練習、実質的には何の拘束もない任意団体であるという絶対的な制約をうけているため、累積赤字をかかえて常に解散の危機に瀕しているといっても過言ではないでしょう。

新響を存続させるものは、一緒にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通の目標となっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、できるだけ沢山の人に聴いてもらいたいという演奏団体としての活動です。昨年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお迎えし、芥川先生とタクトを分担して頂くことにより、外部からの依頼にも応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

最近の主な活動

1971年

11月7日　東日本薬学生合唱連盟演奏会　郵便貯金会館
交響曲第9番＝ベートーベン　　指揮：小林研一郎

12月15日，17日　第九特別演奏会　　日比谷公会堂
パッサカリアとフーガ　ハ短調＝バッハ・ストコフスキー、交響曲第9番「合唱付」＝ベートーヴェン
独唱：大川隆子、秋葉京子、金谷良三、田島好一

72年2月7日　新響新春特別演奏会　　日比谷公会堂
パッサカリアとフーガ、Vn協奏曲＝メンデルスゾーン（独奏：黒沼ゆり子）　交響曲第1番「巨人」マーラー

4月2日　第23回定期演奏会　　東京文化会館
交響曲第36番「リンツ」＝モーツァルト、ピアノ協奏曲第4番＝ベートーベン（独奏：遠藤郁子）、幻想交響曲＝ベルリオーズ　以上指揮：小林研一郎

6月6日　合唱団〝鯨〟演奏会に出演　　日比谷公会堂
《ブルックナーの夕べ》ミサ曲第3番（大ミサ）、テ・デウム　指揮：小林研一郎

8月23日　東響・新響合同サマーコンサート
東京文化会館
はげ山の一夜＝ムソルグスキー・スラブ行進曲＝チャイコフスキー（以上指揮：小林研一郎）、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー・ラヴェル（指揮：秋山和慶）

11月12日第24回定期演奏会　　日比谷公会堂
ファウストの劫罰Op.24より＝ベルリオーズ、2台のピアノのための協奏曲＝モーツァルト（独奏：池場文美、中井正子）交響曲第7番　イ長調＝ベートーベン
（指揮は特記以外　芥川也寸志）

FM東京「おはようコンサート」に新響が出演

12月23日（土）	朝6：30～55	話：芥川也寸志	ベルリオーズ作曲　ファウストの劫罪より
1月20日（土）	朝6：30～55		曲　目　未　定　日時にも変更あるかも
2月24日（土）	朝6：30～55		曲　目　未　定　日時にも変更あるかも

新響第25回定期演奏会

日　時　1973年　3月24日（土）　午後7時――――**東京文化会館**
3月25日（日）　午後6時半――――**神奈川県立音楽堂**

曲　目　＜チャイコフスキーのタ＞
イタリア綺想曲、　ヴァイオリン協奏曲、　交響曲第6番「悲愴」

指　揮：芥川也寸志　　**独　奏**：徳永二男

合唱団 鯨

合唱団鯨は、１９６７年12月に発足以来、５年目を迎えます。

その間、アマチュア精神にのっとった、純粋な情熱のある演奏団体であることを目指し、活動を続けて参りました。

コーラスの団体である以上、演奏会を開催することはごくあたりまえのことですが、私達はそこに、一寸大それたとも云える姿勢を持ちたいと考えます。

即ち、音楽をするという段階では、アマチュアである私達１人ひとりは、１人の音楽家であるという意識を持ち、技術を向上させ、自ら音楽的感動の修得に努力し、演奏会を通して少しでも多くの方々と歓びを分かち合いたいということです。

ですがこの目標は、すぐ達成できるというものではありません。むしろ、どこまで行っても常に先へ先へと進んでいく目標かもしれません。

団を構成している団員は、サラリーマン・主婦・学生等々、音楽を職としない人々からなっていますし、週１回（火曜日）の練習という現実は団を構成する１人ひとりの私と努力が、何よりもその目標を達成するための基礎となることを教えてくれます。

過去、私達の演奏会歴をご覧いただくと、おわかりのように、ヘンデルの救世主・ハイドンの天地創造・ウォルフのカルミナブラーナ等々、発足間もない団体としてとりあげるには至難といわれる大曲を演奏できたことは、団員１人ひとりの努力のつみあげと、発足以来の常任指揮者であり音楽監督である芥川先生の骨身を惜しまぬ指導があればこそ、と考えるのです。

私達は今、５年目の第九の演奏会にあたり、常識的にはアマチュアには不可能と考えられることを、アマチュアが持つ情熱をもとに着々とつみあげ活動し、将来に向って、より飛躍したいと考えます。

５周年を迎えた 鯨のあゆみ

１９６８．７．３	第１回定期演奏会
12．８	ファミリー・コンサート
12．23．26	新響・鯨　第九特別演奏会
１９６９．５．28	ハイドン ／ オラトリオ「四季」
７．17	コーラスとオーケストラの夕べ
12．21	ヘンデル ／ オラトリオ「メサイヤ」
１９７０．４．８	鯨はるにうたう
７．１	ハイドン ／ オラトリオ「天地創造」
11．25	カール・オルフ ／「カルミナ・ブラーナ」
12．21．23	新響・鯨　第九特別演奏会
１９７１．６．１	フォーレ。モーツァルト ／「レクイエム」
10．１	ＴＢＳテレビ出演
10．19	ファミリー・コンサート
12．15．17	新響・鯨　第九特別演奏会
１９７２．６．６	ブルックナー ／「テ・デウム」「ミサ第三番」

ベートーヴェン

荘厳ミサ

日　時　1973年５月10日(木)　７：00
会　場　渋谷公会堂

指　揮　芥川也寸志
合　唱　合唱団“鯨”
管弦楽　新交響楽団

入場料・ソリスト・未定　　“鯨”事務所（357）5255

★ 団　員　募　集 ★

芥川也寸志の合唱団 鯨 です

過去5年間、合唱団鯨は、「三大オラトリオ」モーツアルトフオーレの「レクイエム」オルフのカンタータ「カルミナブラーナ」ブルツクナーの「ミサ三番」「テデウム」等々アマチュアとしては大曲といわれるものから，ミユージカル、ポピュラー，日本のわらべ唄、等、色々な曲をさまざまな形式で演奏し、現在、合唱音楽の最高峯ともいうべきベートーベンの「ミサソレムニス」の練習にとりかかつています。

あなたも 鯨 の新しい仲間になりませんか！

練 習 会 場　渋谷カワイ・ミュジックサロン 7階 (463~7741)
練習日・時間　毎週 火曜日　午後6時半～9時
練 習 曲 目　ベートーヴェン「ミサ ソレムニス」
入 団 費　500円
団 費　700円 (1ケ月)

お問い合わせ
新宿区須賀町14 大湊ビル4階 (〒160) 合唱団「鯨」357-5255

演奏活動予定
5 月 …… ベートーヴェン「ミサ ソレムニス」
10 月 …… カールオルフ「カルミナブラーナ」「カトーレカルミナ」
12 月 …… ベートーヴェン「第九」

練習会場で お待ちしております。